

# めでる



「日牟禮八幡宮（近江八幡市）」

## Contents

- 2 特集  
令和5年度  
夏の宿泊研修in近江八幡市・沖島方面
- 訪問先の皆様からのメッセージ
  - 参加教員の感想(NPOへの期待)
  - 宿泊研修に参加して(学生の声)
- 13 「学内で地域医療の体験ができる」課外授業シリーズ2023
- 第一弾！ プレ問診塾
  - 第二弾！ 連続講座
  - 第三弾！ 最終企画
- 18 ● 滋賀県医師キャリアサポートセンター
- 19 ● 医学・看護学生がつくる  
「じぶんごとcafé」を開催しました
- 20 編集後記



### 沖島診療所

今回ご担当の杉原玄久先生より診療所の様子についてお話をいただき、近江八幡市立総合医療センターの方からも診療所の運営について説明いただきました。最後に公民館の一角にある診療所を見学させていただきました。



沖島に住んでいる方たちが今の沖島での医療のあり方を変えて欲しいとまでは思っていないという考えを持たれていることは、意外で驚き特に印象に残っています。

参加学生感想より

患者さんの症状によって薬や治療法が考えられるように、地域によっても医療のあり方、捉え方が異なる。今回の研修では、それぞれの地域の医療者がその地域の医療の形を模索しているというような印象を受けた。

参加学生感想より



### ～地域散策～

#### 近江八幡市旧市街地散策

2班に分かれ、ボランティアガイドの方に案内してもらいながら、旧市街地を散策し、歴史的建造物に触れることができました。



島民の高齢化や常勤医がない現状での救急体制、診療所の実態を知ることができ、地域医療のあり方や特有の問題について考えることができました。

参加学生感想より

将来訪問看護師をめざしていた自分にとって沖島のような地域の医療をみて気づいたこと、感じたことは、より訪問看護の重要性を見出すことができ非常に役に立った。

参加学生感想より



実際の現場を見学させていただけたことで、今までのイメージが覆りました。島の医療に限界はあるが搬送の手はずが整っているため、すぐに島外の病院に行けたり、沖島診療所内に心電図があったりと新しく知ることがたくさんありました。

参加学生感想より

### ～昼食～



漁業組合・婦人会『湖島婦貴会』の方に、地元の食材を使ったお弁当を作っていただきました。ご馳走様でした！



## ヴォーリス記念病院

五月女院長の挨拶のあと、前田副院長から病院の概要や、病院の特色についてご説明いただきました。また院内のチャペルに仕えておられるチャプレンの中村先生から病院におけるチャペルの在り方・役割についてもお話しいただきました。また、澤谷事務長から地域包括ケアシステムについてご説明いただいた後、新築された院内（緩和ケア病棟・リハビリテーション病棟）を見学させていただきました。

途中、三ツ浪理事長も挨拶に来ていただき、ヴォーリス記念病院の原点についてお話しいただきました。



沖島にて



緩和ケア病棟の充実さ、勤務している方々の考え方などが知れて、非常に魅力を感じました。

参加学生感想より

教会がある病院は珍しいと思いましたが、患者さんがどうしようもない思いを整理する場として、とても重要な役割があると思いました。また、亡くなった患者さんとお別れをする部屋が緩和ケアにあったことも驚きで、遺族の心にも寄り添うことができる病院だと思いました。

参加学生感想より



沖島、近江八幡ともに感じたことは、風景の美しさです。里山的な自然の景観のみならず、通りや街並みにまで情感がありました。普段過ごすときにも意識したい視点が得られたと感じました。

参加学生感想より

ガイドさんの案内で、綺麗な街並みを散策することができました。建てられた当時の知恵や考えがふんだんに使われた建物を見て回ることができて、とても楽しい経験となった。

参加学生感想より



柵の高さが変えられる入浴練習の設備や上から吊り下げられる歩行訓練の設備を初めて見て、退院後のQOLにかかわるリハビリの大切さを実感しました。

参加学生感想より

患者さんのニーズに合わせたリハビリテーション施設やホスピスの部屋を見て衝撃を受けました。患者さんがいつでも自宅に復帰できるように支えていく姿勢に感動しました。

参加学生感想より

病院専属の牧師さんのお話を聴き、様々な思いを抱える患者さんと寄り添われている様子を学んだ。医療において身体的苦痛だけでなく、精神的苦痛を含む全人的苦痛に対するケアの重要性を感じることができた。

参加学生感想より

今回も地域の方々をはじめ沢山の医療関係者等の方々にご協力いただき、学びの多い研修となりました。ありがとうございました。

## ■ 沖島診療所へようこそ

杉原医院 院長 **杉原 玄久**



8月24日木曜日、たくさんの方が沖島に来てくれた。将来は、医療従事者になる予定の人たちである。僕も、この日は朝から沖島に行って、島民の健康増進のために何ができるのか話し合ったり、診察室を見てもらったり、お弁当と一緒に食べたり、島内を一緒に散歩したりした。

健康増進といってもなかなか難しい。食生活や運動、生活習慣の改善などは、島外に住む人とあまり変わりはないだろう。果たして島民の健康状態は、他の近江八幡市内の住民と比べて、そんなに心配されなくてはならないほど悪いのだろうか？僕は普段は、安土町東老蘇で診療している。そこに来る人たちと比べても、特に差はないと感じる。高齢化が進んでいるため、島内の利便性（バリアフリー）や住環境の改善は必要だと思う。空き家の整理をして、歩道や自転車道の整備、車いすでもスイスイ通れる道にしてほしい。家は断熱材の入った壁で、家の中は寒暖差が少ない様にしてほしい。港から船に乗るのも車いすでもスイスイ降り降りできるようにしてほしい。遠隔通信でオーダーした買い物は、ドローンで家の前まで配達してほしい。山の整備も、年中、山に入って散歩したり、イベントに使えるようにしてほしい。様々な障害のレベルに対応できる運動施設を作ってほしい。これだけ整備できれば、移住者や短期宿泊者、企業のオフィスも増えるのではないだろうか。でも、こんなにたくさんの「欲しい」が島民だけでできるわけがない。沖島のことを気にかけてくれる人を増やすことが大事になっている。



沖島コミュニティセンター内での研修



診察室見学の様子

診療所にある道具は、血圧計、聴診器、ペンライト、舌圧子、打診器、パルスオキシメーター、体温計ぐらいしかない。血液検査もある程度、決まった項目しかできないし、結果も翌週にならないと患者さんには伝えられない。8畳ぐらいのスペースに、受付事務（2人）、薬局（薬剤師1人）、診察室（医師1人、看護師1人）がある。超コンパクト。ここに患者さんが一人入ったら、8畳に6人。一人分の空間は1畳とちょっとしかない。必然的に診察も周囲の目が気になるようなところでしかできない。薬も自分の診療所ほど自由には選べない。院外処方もできないから、近江八幡医療センターに採用されている薬しか選べない。しかし、往診は徒歩で行けるし、訪問看護も来てくれる。訪問介護もリハビリも来てくれる。ヴォーリス記念病院も往診に来てくれる。救急搬送も、最近少し進化した。

これから、できるだけ長く、湖水で人の生活する島として存在してほしい。将来、人のいない島になったニュースを聞いて「あーあ」と思いたくない。是非、資格が取れたら、もう一度沖島に来て、島民たちと、たくさん情報交換をして欲しい。沖島の季節を味わってほしい。サクラも紅葉も綺麗だし、ビワマスもウナギもおいしいから食べてほしい。杉谷浜で湖水浴を楽しんでほしい。

世界中に同じような環境、もっと大変な環境の集落があり医療を待っている人たちがいる。そういうところに自分が医療従事者として行くチャンスが回ってきたときに自然に足が出る、そういう医療人になってほしい。沖島診療はそういうことを考えるきっかけになると思う。

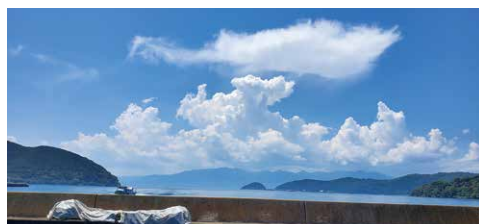
島の未来を考えて、小さい島だけど、自然は厳しいけど、ちょっと不便だけど、快適に暮らしていける、そんな島になって欲しい。

1年で8回しか出番がないけど、船に乗って仕事に行ける貴重な経験を失いたくないのです。

### 沖島の四季



春：コミュニティセンター前の桜の木



夏：堀切港からの沖島と入道雲



秋：漁業組合横の紅葉



冬：連絡船から見る伊吹山の雪

## ■ 訪問先の皆様からのメッセージ

## ■ 近江八幡市立沖島診療所へ研修を受け入れて



近江八幡市立総合医療センター  
患者総合支援課 参事

北川 博也

## ① 沖島診療所概要

沖島は、淡水湖内で集落が形成されている島として世界的にも希少で、現在、300人弱の住民が生活されています。その多くは、漁業関連の仕事に従事され、主要な交通手段は船舶で、緊急搬送時のために、救急艇を配備しています。

沖島診療所は、地域の医療を守るため、近江八幡市からの委託を受け、近江八幡市蒲生郡医師会の協力のもと、近江八幡市立総合医療センターの職員で週1回午後からの診療を行っています。診察以外にも、往診や、ワクチン接種、特定健診等を実施し、島民の方々の健康増進に寄与しています。

## ② 研修会の感想

沖島に関して、非常に熱心に入念な下調べをされていたことに驚きました。また、多くの学生さんが、沖島診療所に興味を持っていただいたこと、今後の地域医療に対する個々の意見をしっかり持っておられたことを目の当たりにし、きっと将来、素晴らしい医療人になられると感じました。

当日、説明させていただいた沖島診療所の担当医からも、学生さん達との交流の場を含め、とても有意義な時間であり、楽しかった。と伺っております。また、次回の来島をお待ちしています。

## ③ 将来の医療人への期待

沖島診療所を体験していただいたことで、僻地の医療に少しでも興味を持っていただけたら、ありがたいです。島民の高齢化も進んでおりますが、地域医療を支える医療側も後継者問題や、人員不足など、多くの課題を抱えています。そのためにも、この研修会は非常に重要な意義があると思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



沖島漁港にて、医療チームの皆さま  
(杉原医師、看護師、薬剤師、事務)と学生で記念撮影

## 〈問い合わせ先〉

〒523-0082

近江八幡市土田町1379

近江八幡市立総合医療センター

患者総合支援課 参事 北川 博也

TEL : 0748-31-1204

FAX : 0748-31-1205

訪問先の皆様からのメッセージ

## 将来の医療人への期待 全人的医療のアート

公益財団法人近江兄弟社 理事長 **三ツ浪 健一**



近代医学の父と呼ばれるWilliam Osler (1849-1919)は講演で、「私は若い頃から純粋科学への関心を持ち続け、医学の基礎となるサイエンスとアートを相互に関連させようと一生涯努力し続けてきた。」「医療とはただの手仕事ではなく技術である。商売ではなく天職である。すなわち、頭と心を等しく働かさねばならない天職である。」と述べました。“Listen to your patient. He is telling you the diagnosis.”という言葉も有名で、医療現場において、傾聴と共感が重要であることを端的に物語っています。Oslerの時代以降、医学におけるサイエンスは飛躍的に進歩して今日に至っていますが、アートはどれくらい進歩したのでしょうか。

全人的医療とは、身体的レベル、精神的レベル、社会的レベル、倫理的レベル、霊的レベルでの多角的なアプローチを行う医療です。医学が進歩し、細分化された結果、臨床各科の専門医が生まれてきましたが、専門医は患者の疾患に診療の重点をおき、患者を一人の人間としてみることを忘れがちであることが指摘されており、そのような傾向に対する警鐘として、全人的医療という言葉が使われます。

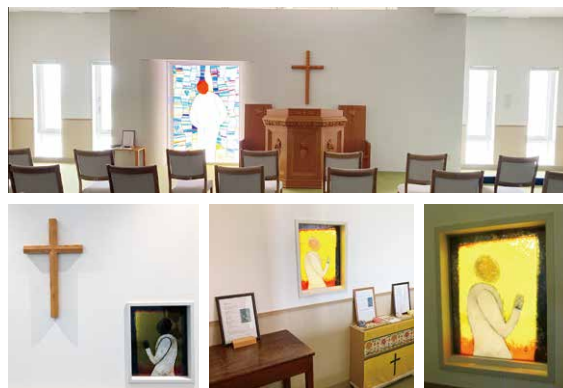
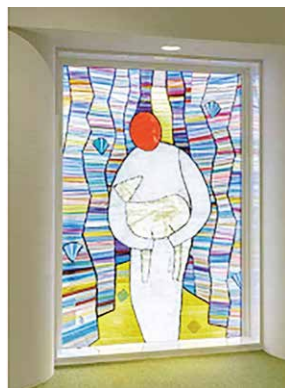


屋上庭園 リハビリを中心に利用

すなわち、患者の診断・治療に際して、疾病にのみ注目するのではなく、患者に疾病を有する個人として対応するのが全人的医療です。

淀川キリスト教病院相談役の柏木哲夫先生は、全人的医療には、差し出すことができる技術力、支えることができる技術力と人間力、寄り添うことができる人間力、そして背負うことができる宗教の力が必要であると言っておられます。さらに、寄り添いに求められる人間力として、聴く力、共感する力、受け入れる力、思いやる力、理解する力、耐える力、引き受ける力、寛容な力、存在する力、ユーモアの力が必要であり、これらのうち、最も重要なのが聴く力、最も困難なのが共感する力であるとのこと。

このように、共感、すなわち相手の思考や情動状態を認識・理解することは全人的医療を実践するためにとても重要ですが、他人を完全に知ることは決してできることではなく、うわべだけの共感になっ



### チャペル

- ホスピスの患者さんをはじめ、地域の方にも親しまれるように1階に配置
- チャペル正面と祈りの部屋に、絵画をモチーフとしたテルマートガラスを配置
- 礼拝集会の他、会議・式典等多目的な使用を想定

てしまうことがあります。さらに、つらい状況にいる人の苦しい気持ちに共感しすぎて、自分自身の心が疲れてしまう共感疲労を起こしてしまうこともあります。このような状態から抜け出すには、コンパッション（慈しみ）やマインドフルネス（気づき）が役に立つようです。

米国のニューメキシコ州サンタフェにあるウパーヤ禅センター創設者のJoan Halifax博士は、仏教指導者、禅僧、人類学者で、医学人類学で博士号を取得し、ハーバード大学で医療民族植物学の名誉研究員も務めました。彼女はコンパッションを、他者の苦しみを心から気づかい、その苦しみの緩和を願うことと定義しています。人の役に立とうとするとき、利他性、共感、誠実、敬意、仕事への関与（とりわけ人を支援する仕事に従事）の5つの資質が重要ですが、これらはいずれも度を超すと害になる危険をはらんでおり、表裏の二面性の瀬戸際にあつて、エッジ・ステートと考えられます。これらから抜け出す道となるのがコンパッションで、彼女はそれを実践するために、「注意を集めるGather attention」、「意図を思い出すRecall our intention」、「自らと調子を合わせ、それから相手と合わせるAttune to self and then other」、「何が役立つかを考えるConsider what will serve」、「関与をもって実行し、完了するEngage and end」の頭文字を連ねたGRACEというプログラムを開発しました。これにより、均衡のとれた注意力と思いやり、私欲のない心と洞察力、倫理的行動を呼び覚まし、全人的医療の推進に繋がりたいものです。

マインドフルネスは、今この瞬間に心を開き、自分の中で起こっていること、他人のこと、状況について気づきを実践することです。もともと、2600年前にブッダが推奨した自らの体験と関わる際の意識の持ち方のことで、瞑想の実践を重ねて自己の内部を深くみつめ、一つひとつの瞬間の体験を落ち着いて観察できるようになると、無意識に繰り返されてきた自動的・習慣的反応に気づくようになり、適応的な対応や生き方を選択する新たな可能性が引き出されるというものです。マサチューセッツ工科大学大学院で分子生物学を専攻したJon Kabat-Zinnが開発したマインドフルネス・ストレス低減法や自分自身へのコンパッションに焦点をあてたマインドフル・セルフ・コンパッションなどのプログラムがあり、正式にはこれらを受講する必要がありますが、これらの考え方を知るだけで全人的ケアの推進に役立つように思われます。

William Oslerは、1899年2月1日、Albany Medical Collegeの学生への講演で、「気の毒なほど苦悩する人に対して優しさと思いやりの心をもつための最もよい方法は、自分自身が映っている鏡を心にもつことで、自分の弱さをしっかりとみつめればみつめるほど、同胞の弱さに対してより優しくなれる。」と述べました。これは、自分自身の苦痛をみつめつつ（マインドフルネス）、自己に対して優しさと思いやりをもつ（セルフ・コンパッション）と、他人をも慈しむこと（コンパッション）ができるということで、全人的医療に役立つアートは120年以上に亘って、このような心の持ち方にあるようですので、これを習得できるよう努力していただくことを期待しています。

Voices 公益財団法人 近江兄弟社  
 **ヴォーリス記念病院**  
 VORIES MEMORIAL HOSPITAL

Neighbor love and Service.  
**思いやりの心で  
 全人に寄りそう**

所在地 〒523-0805 滋賀県近江八幡市円山町927-1  
 電話 0570-01-5211  
 FAX 0748-32-2152  
 休診日 日・祝日



ヴォーリス記念病院敷地全景

## ■参加教員の感想(NPOへの期待)

### 広報誌めでる23号の発行によせて

滋賀医科大学 理事 (教育・学生支援・コンプライアンス担当)

副学長 松浦 博



滋賀県は古くから文化・経済の先進地として栄えてきており、多くの歴史的建造物や文化遺産があります。また琵琶湖を中心とする緑豊かな自然にも恵まれています。このように、歴史、文化、自然など多くの魅力にあふれている滋賀県で、住民の方々に安全に安心して暮らしていただくためには、地域で充実した医療体制を維持・発展させていくことがとても重要です。認定NPO法人滋賀医療人育成協力機構は、多くの医学生・看護学生に在学中に滋賀県の医療、地域の方々やさまざまな魅力に直接触れて滋賀県を好きになってもらい、将来的に滋賀県の地域医療に貢献する意識を高めてもらうことを主な目的として活動しています。

令和5年8月24日(木)には、滋賀医科大学医学科・看護学科、県内看護専門学校の学生さんたちと沖島診療所での研修、近江八幡市の地域散策、ヴォーリズ記念病院での研修を行いました。沖島診療所の杉原 玄久先生、公益財団法人近江兄弟社理事長の三ツ浪 健一先生、ヴォーリズ記念病院院長の五月女 隆男先生、副院長の前田 憲吾先生、事務長の澤谷 久枝様、チャプレンの中村 信雄先生に医療のニーズや診療の実際について分かりやすくご説明いただき、本当にありがとうございました。それぞれの医療機関が、地域の特徴や患者の方々のニーズに合わせた医療を大変丁寧に行っておられることを学ぶことができました。さらに、当日は近江八幡市内に残る古い商家の町並みも見学でき、当時の近江商人たちの活躍にも思いをはせることができました。

今後も本機構は滋賀県内の医療系の学生さんたちに対して滋賀県の特徴的な医療や魅力に触れる機会を提供して、滋賀県の医療に貢献する人材養成に努めて参りますので、ご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

### 夏期宿泊研修に参加して

滋賀医科大学医師臨床教育センター

センター長 川崎 拓



今回同行させていただいた研修先は近江八幡市にある、沖島とヴォーリズ記念病院でした。特に沖島は世界でも珍しい湖の有人島ということもあり、以前から興味がある場所で楽しみにしておりました。沖島通船のチャーター船に乗り、リゾート気分です島に到着しました。沖島は非常にコンパクトで自動車もない昭和レトロな雰囲気もあり、想像以上に穏やかな場所でした。沖島診療所の杉原先生にお話を聞くと、開業医の先生方が交代で週一回診察し、もし急病人が出れば消防救急艇が島から港まで搬送、救急車で近江八幡医療センターまで運ぶ体制だとのこと。近江八幡旧市街を散策後、ヴォーリズ記念病院を訪問し緩和ケア病棟とリハビリ施設を見学させていただきました。出迎えてくれた院長の五月女先生は、大学の1学年上の先輩でした。同行とはいいいながら、一緒に行った医学生や看護学生たちと一緒に勉強し楽しむことができた一日でした。

NPO法人滋賀医療人育成協力機構の皆様には、このような滋賀の地域医療を体験できる機会をご提供いただき感謝申し上げます。今後も引き続き医学生・看護学生が興味を引くイベントを企画していただけることを期待しております。



滋賀県立大学 人間看護学部

教授 本田 可奈子



教員として研修に参加させていただきました。今回はじめて沖島に来させていただきました。島民さんの気持ちや生活、近江八幡市の活動などを、空気感含めて感じて、そして現場の方と学生さんたちの意見交換をみて、ライブで学ぶってすばらしいなあと改めて感じた次第です。私は滋賀県に住んで20年になりますが、長く住んでいても結構自分の生活圏の滋賀しか知らないものです。この研修は滋賀のdeepな場所を体験でき、地域の方から多くのご協力を得られているため、滋賀の課題だけでなく、滋賀の強みや将来の可能性も発見できる貴重な研修になっていると思います。なかなかこのような規模の研修を企画することはできません。滋賀県の看護職人材は非常に不足しており、人材確保は大きな課題です。

滋賀県では地域医療に従事する看護師を養成するために、県内看護系大学にも地域枠という奨学金制度を導入しました。学生さんが地域に根差してくれるためには、その地域に関心をもつ必要があり、この活動は非常に期待されます。機構の活動に賛同し、自学でもどんどん宣伝していきたいと思います。

滋賀県立大学 人間看護学部

教授 古株 ひろみ



今回の研修に、初めて参加させて頂き、3つの発見がありました。

1つ目は、滋賀県に生まれて初めて沖島に伺い、講義から診療を支える先生方のご苦労や島の生活とその生活を支える医療の実際を知り、普段は考えていなかった島の生活を支える看護職の働きからも刺激を受けました。

2つ目は、学生の皆さんがとても積極的に学ばれている姿勢を見て、現場で学ぶことの大切さを感じると共に、関わっておられる方々の熱い思いがあるからだと思感しました。

3つ目は、いろんな学年の医学生の方や各校の看護学生の方が一緒に滋賀の医療を学ぶ機会があることで、将来滋賀の医療を支える医看連携や、看-看の連携といったネットワークの基盤づくりとなる活動だと感じました。来年度から、滋賀看護地域枠（滋賀県内に6年間従事）が3大学で始まります。この研修会への参加を呼びかけ、更なる輪を広げられればと思いました。



## 宿泊研修に参加して(学生の声)

### 滋賀医科大学 医学科 第1学年

地元出身ですが意外と知らないことが多く新鮮でした。沖島診療所ではその狭さや設備の少なさを拝見し驚きました。一方で、本土と1.5kmほどしか離れておらず比較的すぐに市内の病院に行けることから、沖島での医療は私がもっていた「離島医療」のイメージとは異なるように思いました。ウォーリス記念病院では、設備・施設の充実度に驚きました。また、ホスピスを見学しながらチャプレンの話聞き、静かに心の内や思い出を語ることが、患者やその家族の心のケアに与える影響の大きさを感じました。

### 滋賀医科大学 医学科 第1学年

離島での医療と、キリスト教の理念に基づいた医療について学ぶことができました。どちらも特殊な医療であり、実際に赴きお話を聞いてみると、この宿泊研修に参加する前に抱いていたイメージとは異なるものでした。沖島に住んでいる方たちが今の沖島での医療のあり方を変えて欲しいとまでは思っていないという考えを持たれていることは、意外で驚き特に印象に残っています。また、各地を散策したのも楽しかったです。滋賀県についてまだまだ知らないの、これからぜひ宿泊研修に参加してもっと滋賀県を知っていきたく感じました。

### 滋賀医科大学 医学科 第1学年

先日は宿泊研修に参加させていただきありがとうございました。沖島での医師との質疑応答では、離島医療の実情を知り、実際に診察室を見てみると島の医療の難しさを感じました。特に、薬剤を島からその都度もって来ているところや船で緊急搬送しているところに大きな違いを感じました。また、ウォーリス記念病院の見学では、患者さんのニーズに合わせたリハビリテーション施設やホスピスの部屋を見て衝撃を受けました。患者さんがいつでも自宅に復帰できるように支えていく姿勢に感動しました。

### 滋賀医科大学 医学科 第1学年

高校の修学旅行で五島列島の僻地医療を学んだが、今回の沖島の医療はかなり異なるもので、興味深かった。その土地土地によって生活スタイルが異なるため、その土地にあった医療を提供することは非常に難しいと思う。僻地では、その土地の人口に医療を提供する体制を作っても医療が余ってしまう現状があり、なかなか医療を優先させることができにくくなっているということも分かった。ウォーリス記念病院では、安全性と機能性と患者さんやそのご家族の安心感をバランスよく兼ね揃えた病院として見る事ができた。全員の心や体の負担を軽減できる地域拠点であると感じる。

### 滋賀医科大学 医学科 第2学年

「先義後利而栄」孟子→近江(八幡)商人家訓になったと向所先生からご紹介いただいた言葉ですが、それが近江商人の理念にまで現在までも息づいているということを感じることができました。沖島。ウォーリス。共に地域の特性に沿って出来上がった医療文化があると感じました。出来上がっていた文化慣習とともに、あらたに文化を作っていたということ。ウォーリス記念病院などは、地域(コミュニティであり、キリスト教的な理念もあって、communionという言葉も思い浮かべましたが)を作っていくという目線の中での医療、福祉のあり方を作っていたと感じたので、それはとても感銘を受けた。village構想なるものを、医療福祉圏、経済圏、生活圏を総合したものと理解しましたが、それを具体的な実践にも落とし込んでされていると感銘を受けました。沖島診療所については、住民のニーズと、それをどれだけ熱量で求めているかということ(ニーズの根底にある思い)、行政的に可能なこと、医療機関の側の機器や人材、体制などのニーズ、そういったものを擦り合わせながら進めているということが感じられました。見学しながら、Dr.コトー診療所というドラマがあったことを思い出していました。沖島、近江八幡ともに感じたことは、風景の美しさです。里山的な自然の景観のみならず、通りや街並みにまで情感がありました。普段過ごすときにも意識したい視点が得られたと感じました。

### 滋賀医科大学 医学科 第1学年

この研修に初めて参加しましたが、非常に充実した1日を過ごすことができました。訪問地域の病院や診療所といった医療機関を見学させていただくだけでなく、その地域のまちなかを実際に散策することによって、地域全体の空気感を肌で感じながら研修を受けることができる点がこの研修の良いところだと思っています。各訪問場所で、ものすごく詳細で深いお話を何と云っても「タダ」聞けるのがイチオシポイントです。次の研修も受けたいと思っています！目指せ全地域制覇!!

### 滋賀医科大学 医学科 第2学年

今回の研修では、沖島と近江八幡市について知ることができた。沖島は、1年生での地域論という授業で、他の学生さんが調べて発表されていたので、どのような歴史を迎えてきたのかを漠然と知っていたが、まさか実際に上陸して見学することができると思っておらず、非常に貴重な経験となった。島内での医療は、今まで比較的高度な医療が整った病院を見学していたので、現状にはかなり驚いたが、いざとなれば島外の医療機関にかかるともできると知り、島に合った医療が行われているのだなと知った。また、沖島探索では、島民の人とすれ違いざまに挨拶をするなど、ほんの少しだけだが交流ができてよかったと思う。

近江八幡市の旧市街地散策では、ガイドさんの案内で、綺麗な街並みを散策することができた。建てられた当時の知恵や考えがふんだんに使われた建物を見て回ることができて、とても楽しい経験となった。ウォーリス記念病院での研修では、患者さんの気持ちや考え、自主性を大切にしている病院なのだと感じた。キリスト教を大切にしている病院らしく、考え方は(良い意味で)独特だなと感じたが、根本にある「患者さんのために」という考えは、むしろどの病院よりも強く存在しているのではないかと感じた。今回の研修で、授業をただ受けるだけでは学べないことが沢山あるのだということを知った。このように、研修でしか得ることのできない知識や経験をもっと積んでいきたいと思う。

### 滋賀医科大学 医学科 第2学年

今回の里親学生支援事業の研修で、最も印象に残ったのは沖島診療所です。沖島診療所は、公民館の1室が診察室になっていました。見学する前は、沖島診療所という1つの施設があると思っていたのでとても驚きました。しかし、その診療所はしっかりと機能を果たして、万全の医療体制があるとは言えないけれど、沖島に必要な形の医療が提供されているのだということがわかりました。地域医療とは、その地域に沿った医療の形を提供することなのだということを今回の宿泊研修で学ぶことができました。

### 滋賀医科大学 医学科 第3学年

今回の研修では、自分の目で見て感じる事ができ、また沖島での診療室の様子やウォーリス記念病院の緩和ケアなどの様子は実際に足を運んでみないと感じられないことでした。特に、病院としてはウォーリスが印象的で、教会がある病院は珍しいと思いました。あのように患者さんがどうしようもない思いを整理する場として、とても重要な役割があると思いました。また、亡くなった患者さんとお別れをする部屋が緩和ケアにあったことも驚きで、遺族の心にも寄り添うことができる病院だと思いました。個人的には、その部屋に飾られていた絵がとても好きでした。

### 滋賀医科大学 医学科 第4学年

今回の里親研修で訪れた場所は、どちらも実際に行き行って体験しないと本当のところはわからない場所だったと思います。沖島の静けさや住民の雰囲気、ウォーリス記念病院の緩和ケア病棟の充実さ、勤務している方々の考えなどが知れて、非常に魅力を感じました。大阪や京都のように、ブランド力の高い地域と比べて、滋賀の情報は入りにくいと感じます。だからこそ、滋賀の土地や病院の特色を知ることが、自分で考える材料を増やすことに直結すると思うので、今回の里親研修は自分の知見を高めるためにとっても有用だったと感じております。

### 滋賀医科大学 医学科 第4学年

沖島における医療は、公民館という別施設を診療施設として用い、週に1回の医師の先生の派遣によって成り立っていました。この大自然に囲まれた沖島に住むことを選ぶ島民の方々にとっては、診療科の揃った大きな病院は島内には不要であるのかもしれない私は考えました。救急時には、対応できる専用ボートが常備されており、また、堀切港への定期便が1時間に1本ほど毎日運行されていることで必要に応じてかかりつけ医に通うことも十分に可能であると感じました。ウォーリス記念病院は、緩和ケア病棟や、回復期リハビリテーション病棟などの設備を持ち、急性期を担う病院からの患者を受け入れるといった、需要がどんどん大きくなっていく領域を担う病院でした。リハビリテーション施設には入浴の動作練習機械や上から牽引して歩行練習が可能な器具など、高い充実度がありました。これから始まる病院実習に先立ち、今回の2施設を見学することで、大病院に来る患者さんたちが普段はどのような暮らしをしているのか、イメージすることができました。全ての人々の暮らしの中に医療があるということを目頭に置いて実習に臨みたいと思います。

### 滋賀医科大学 看護学科 第1学年

初めて沖島のような小さな診療所をみて、患者さんのプライバシーがなかったり、患者さんのほとんどが高齢者であったりと本当の地域医療をみれた。そして、将来訪問看護師をめざしていた自分にとって沖島のような地域の医療をみて気づいたこと、感じたことは、より訪問看護の重要性を見出すことができ非常に役に立った。また、ウォーリス記念病院で終末期の現場や霊安室まで見学させていただき、人間の死が起こる現場特有の雰囲気を感じ、働いていた医療人を本当に尊敬した。一日を通して貴重な体験ばかりで非常に有意義な時間だった。

### 滋賀県立総合保健専門学校 看護学科1年

私は、この研修を申し込んだ際、離島の方は不便であり、医療をどのように充実させるか、現場を見て考えなければならぬと考えていました。しかし、実際研修で、訪問診療されている先生のお話をお聞きして、私の考えは違うのだと思いました。沖島の方は現在の生活を大切にされており、沖島に訪問診療されている先生は、島民の方の生き方を尊重されているように感じられました。政府の理解もあり現在の診療所があるので、この先生のように、沖島を理解し、今後を担う看護師と医師が必要であり、知ってもらおうと言う事がこの研修の目的なのだと感じました。そしてもう一つ、研修の中でも説明されていたように、沖島の小学校にあえて通う子供達もいるとお話されていたので、沖島はさまざまな子供達の居場所であり、選択肢の一つとして社会的役割も果たしているのだとも思いました。一つ心配だったのは、街を探索した時に、建築物の老朽化でした。世界的にも珍しい、人が住む湖の離島の存続を考えた時、新しく来られる方も現在住まわれておられる方もお家が必要であるが、新しく建てたり、修繕にはコストの負担が大きく、今後の存続も気になる所でした。ウォーリス記念病院訪問の感想は、充実したリハビリ設備と清潔感、緩和ケアの利用者やその家族の気持ちを大切にされた受け入れ体制に感銘を受けました。まだまだ一年で知らない事が多いけれど、患者さんの最後や患者さんへの寄り添い方への勉強にとり、今後の学びに役立てたいと思いました。

### 宿泊研修に参加して(学生の声)

### 滋賀医科大学 医学科 第3学年

今回も貴重な機会を設けてくださり、ありがとうございました。第1学年の時から参加させていただいているのですが、毎回違った体験をさせていただき、学びが深まっています。今回は沖島という湖に浮かぶ島の見学をさせていただきました。実際に現地の医師の方や行政の方々とお話をさせていただく機会があったことで、より近い距離で学ぶことができたと思います。島の散策の際に、大学の先生方ともお話ししながら回れたことも、普段とは違った経験ができて良かったと思います。コロナウイルスによる活動の制限が徐々に解除されていく中で、再びできるようになったこと、コロナ前には気づかなかった新しくできるようになったことが増えていっているように感じます。

### 滋賀医科大学 医学科 第6学年

離島医療問題がこんなに近くに有るとは知りませんでした。普段、多少の不自由さは有っても、どうにかしているのが離島医療がそこそこで済まされているのかもしれないと感じました。今回は日帰りだったので、実際の利用者である島民の方から直接お話を伺うことが出来なかったのが残念ですが、それで島民が満足されているのなら、医療の理想の形を押し付けるのも違う気がしました。今回参加して、身近な医療圏の知らない一面を知れたことは、滋賀県の医療事情を理解する一助となりました。企画に関わった皆さまに感謝致します。

### 滋賀医科大学 看護学科 第1学年

研修に行き行って感じたのは、「医療のかたち」だ。患者さんの症状によって薬や治療法が考えられるように、地域によっても医療のあり方、捉え方が異なる。今回の研修では、それぞれの地域の医療者がその地域の医療の形を模索しているというような印象を受けた。卒業後のことはまだ何も決めていないながらも地域医療に携わる可能性が捨てきれない今、自分が地域で働くとしたら何が出来るか、そのために何をしなければならぬかを考えなければならぬと強く感じた。

### 滋賀医科大学 看護学科 第1学年

今回の宿泊研修では普段大学で座学をするだけでは得られない知識や経験を得ることが出来ました。まず、沖島での医療体制は医師が輪番制で通っていたり、公民館の中の一室を活用していたり自分が思っていたよりも工夫を凝らしたもので驚きがたくさんありました。またウォーリス記念病院では特にリハビリ室が印象に残りました。柵の高さが変えられる入浴練習の設備や上から吊り下げられる歩行訓練の設備を初めて見て、退院後のQOLにかかわるリハビリの大切さを実感しました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 2年

今回の研修で特に印象に残っているのは沖島診療所の見学です。今まで離島の医療について興味はありましたが知る機会がありませんでした。これまでは勝手なイメージで離島での医療は不便なことが多いと思っていました。しかし、今回実際の現場を見学させていただいたことで、今までのイメージが覆りました。島の医療に限界はあるが搬送の手はずが整っているため、すぐに島の病院に行けたり、沖島診療所内に心電図があったりと新しく知ることがたくさんありました。沖島診療所のナースはドクターよりも比較的長期間同じ方が担当されているとのことだったので、島民と深い関係を築きやすく、より質の高い看護を提供できそうだと思います。今回の研修を終えて、地域医療についてもっと知りたいと思うようになりました。将来地域医療を支える、いち医療スタッフとして働けるように今は勉学に励もうと思います。

滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 2年

今回の研修で1番印象的だったのは、近江八幡市沖島地域での見学でした。まず、沖島というのが小豆島のような本州からかなり距離のある場所ではなく、船で10分程の距離感の場所にあるという点でした。なにかあればすぐ本州に行けるといえる点では、島民のみなさんの安心感へ繋がるのではと感じました。また患者さんは高齢で高血圧や糖尿病を待ち、漁業をしている人が多いが、生活リズムの違いから、その生活習慣指導が大変だと医師の方のお話しが印象的でした。島民が孤立する心配はあまりないとのこと、地域の繋がりが強い印象でしたが、高齢化に伴う健康問題は、なにか良い解決策が見つければいいなと感じました。学生同士の交流もとても良い刺激を受け、次回研修もぜひ参加できればと思います。

滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 2年

先日は貴重な研修に参加させて頂き誠にありがとうございました。近江八幡市があんなに広いとは思いませんでした。また、沖島での研修はとても意外な事が多く驚きばかりでした。250人ほどの人口で高齢化が進んでいるなか、医療機器も足りていない中で生活をされている。診療所も1室でプライバシーが配慮されないままの診療。それでも成り立っているのは、5人の先生方と病院と市の連携が素晴らしいからだと思います。チーム医療が大切だと思います。貴重な研修に参加できて嬉しく思います。コロナ禍が続くこの様な研修が多く増えたらいいな、と思いました。

草津看護専門学校 1年

私は今回初めてこの研修に参加させていただき、近江八幡に関する地域医療や歴史、文化について多くのことを学びました。特に沖島では、島民の高齢化や常勤医がいない現状での救急体制、診療所の実態を知ることができ、地域医療のあり方や特有の問題について考えることができました。また、普段なかなか関わる機会のない先生方や他学生の方と様々なお話をすることができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。この研修を通して、さらに滋賀県の魅力について知りたいと思いました。ありがとうございました。

草津看護専門学校 看護学科 1年

沖島夏期宿泊研修へ参加させて頂きありがとうございました。沖島夏期宿泊研修を通して色々学ぶことが出来ました。沖島の診療所は、私が想像していたドクターコートに出てくるような診療所とはかけ離れていて、想像とは全く違っただけで、島にある唯一の病院で島民の方々からすると大切な場所なんだと感じました。救急を要する時には救急艇が走っていると聞いて驚きました。救急艇を使っても病院に着くまでには時間がかかるので島に住んでいる人は何かあった時はとても大変なんだろうなあと感じました。近江八幡のヴォーリス記念病院では、緩和ケアについて色々知ることが出来ました。今まで緩和ケアと聞くと「死ぬ人の為の病棟」というイメージがありましたが、ヴォーリス記念病院を訪問してから少し印象が変わりました。人が死ぬ最後まで寄り添う病院で、リハビリテーションなどもとても充実しており、部屋も一つ一つ工夫されていてすごいいいと思いました。沖島散策や近江八幡散策などの遊びも多く、とても楽しく学べることが多い1日になりました。

滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 2年

沖島では、離島ならではの環境で行われている医療を見ることができました。診療所がとても狭かったのが印象的です。スペースが限られていることで患者さんたちのプライバシーや個人情報を守れるのか気になりました。ヴォーリス記念病院では宗教の教えのもとで医療が行われていたり、チャプレンの方がおられたり他の病院とは違う特色を学びました。チャプレンの方のお話から、どれだけ励まされても自分の病気について整理がつかない患者さんもおられると思います。そんなとき、ゆるぎない神という自分だけの存在がいたら救われることもあると分かりました。また機会がありましたらぜひ次回も参加したいです。

滋賀県立総合保健専門学校 看護学科 2年

沖島での研修では、公民館の一室に設けられた診療所の見学と医師のお話より、島の住民の健康を支えておられる現場の様子を知ることができた。限られたスペース・設備でもできることにも限界があると思うが、医療センターとの連携により住民が安心して医療体制だと感じた。ヴォーリス記念病院では、病院専属の牧師さんのお話を聴き、様々な思いを抱える患者さんと寄り添われている様子を学んだ。医療において身体的苦痛だけでなく、精神的苦痛を含む全人的苦痛に対するケアの重要性を感じることができた。今回の研修に参加し、様々な見学研修、他の学校の学生さん、先生方との交流が楽しかった。非常に良い経験になり、学んだこと、感じたことは、今後の患者さんとの関わりにかかせたい。

草津看護専門学校 1年

今回、初めて参加させていただきました。実際に沖島の診療所を見させていただき、島での医療の大変さや、島民の人たちの求める医療がわかりました。また、ヴォーリス記念病院で、あまり見れないホスピスを見学させていただき、こういった患者との関わり方もあるのかと新たに知ることができました。参加して良かったなと思います。近江八幡の散策も楽しかったです。

草津看護専門学校 1年

今回の研修は今後医療に関わる者として、とても貴重な体験となりました。沖島の診療所の見学では、想像していたよりも大変そうで、コミュニティセンターの一部が診療所になっていることに驚きました。電子カルテやレントゲン設備やCT・MRもなく、医療は誰もが当たり前平等に受けられると思っていたが、離島では難しいことがあると感じました。それとは反対に、ヴォーリス記念病院では、最新の設備と綺麗な建物や病室があり、リハビリ施設もとても充実しており、ホスピスを見学した時は、自分もできるならここで最期を迎えられるなら幸せだろうと思いました。近江八幡市内の散策では、ガイドさんの案内で今まで滋賀県に住みながら知らない近江八幡の歴史に触れることができ、とても勉強になりました。今後、この研修で学んだことを、学校生活で活かせるように勉強に励みたいと思います。このような機会をいただきありがとうございました。

第一弾!  
プレ問診塾  
低学年歓迎!

## 臨床での聴くこと・話すこと ～質問と説明の基本～

浅井東診療所 所長 松井 善典先生  
(滋賀医科大学 医学科25期生)



今年度の「学内で地域医療の体験ができる」課外授業シリーズは、3回連続のつながりを持つ企画となるように学生メンバーと計画しました。

その第一弾では、第二弾、第三弾の宣伝を兼ねて「聴くこと・話すこと」について多面的に考える機会として開催しました。続く第二弾は印象に残った患者さんの物語を複数の講師から聞くことで臨床コミュニケーションをロールモデリングする機会とし、そして第三弾は実践交流会として学生自身がロールプレイを通して学ぶ発展的な機会としました。

今回の第一弾の冒頭では、聴くことと話すことは「よく考えられた練習 (deliberate practice)」で伸ばすことが必要であり、自然な会話や日常のコミュニケーションではなく、意図して目標をもって取り組む練習の重要性から始まりました。聴くこととは、他者を受け入れながら理解するプロセスとも言えます。そして話すこととは、その他者との間に線 (パイプ) を張ってそれで伝わるメッセージを送るという説明を行いました。線 (パイプ) とは、伝えたいことが伝わる相手との関係性や、理解可能な言語の選択や説明の量の喩えです。聞くために話す、話すために聴くといった、「聴くと話す」の両立がプロの診療でありケアのためのコミュニケーションであるというところに、いくつかの例示をしながら進めていきました。

次にOSCEの医療面接の要点を概説し、患者さんとの良好なコミュニケーションの代表としての声かけやその際の態度面、また診療の進め方や環境についても話題にするようなレベルの高いところまでが臨床実習後のOSCEに含まれていることも解説しました。そのような高い実践にむけて、リアルな事例をたくさん見ること、その中で、リアルな手順をイメージできることの重要性を伝え、ロールモデリングとロールプレイが持つ学びの価値について解説しました。

最後にロールモデルの一環として家庭医療の事例集から「医学的な診断の正しさ vs その診断が何を意味するかの患者視点」が交錯する事例を精読し、気づきや疑問を討論して締めくくりました。

前半は講義中心でしたが、最後は参加型となり活発な意見交換ができ、第二弾・第三弾へのまさに弾みがついた第一弾となりました。





## かの日の野球少年へ ～学校に行けない思春期たちとともに歩く地域の医療～

大阪医科薬科大学病院 総合診療科 三澤 美和先生  
(滋賀医科大学 医学科25期生)



2005年に滋賀医科大学を卒業して以来なかなか母校を訪れる機会がなかった私ですが、この度同級生である松井善典先生のお声かけで学生たちにお話をする機会をいただきました。当日は私が開始時間を間違え、多くの学生さんたちをお待たせしてしまい、本当に申し訳なかったのですが、導入から皆さん笑顔で参加してくれありがたく思いました。



今回のテーマは思春期。

まさに参加してくれた学生さんたち自身ど真ん中の問題を取り上げました。思春期世代は本来大きな健康問題を抱えることは少なく、病院を訪れることは多くありません。その中でも少数ながら「学校に行けない」子たちはコロナ禍を経て徐々に増加しています。「学校に行けない」ことは病気ではないかもしれませんが、この病名のつかない状態にこそ生物心理社会的背景（Bio-Psycho-Social Model）が深く関係し、「〇〇科」といった臓器で分類した専門科では対応が難しいため、私たち家庭医・総合診療医が力を発揮することのできる大事な場面だと日々感じています。授業当日は思春期に考えるべき疾患や心理社会背景をみんなでホワイトボードに書き出したりしながら、私が経験した思春期事例を一緒に追体験してもらいました。16歳の少年を例に

- ・思春期の子たちにはどんな心理的特徴があるのだろうか？
- ・現代の「思春期」たちの現状は？
- ・「学校にいけなない」ことは悪いことなの？なぜ解決しなないといけなないの？

などのテーマを取り上げながら本シリーズの共通テーマである「聴く・話す」について掘り下げました。質問には参加者みんな悩みながら、様々に答えを返してくれました。

私が思う思春期診療の大事なポイントは以下です。

- 1) 保護者の不安を受け止め、きちんと身体的疾患の除外をする＝保護者も不安で悩んでいるので“保護者も患者さん”という意識を持つ
- 2) 体とこころがつながっている故に起きてくる「心身症」を理解し、本人・保護者にも起こっていることを理解できるようアプローチしよう
- 3) 医療者は一時的な「安全基地」となり、彼らを“普通”という枠組みから解放してあげよう
- 4) 医療者だけでは解決できない問題が多く、本人・家族はもちろん、学校、サードスペースとなる支援場所、心理士やカウンセラー、リハビリ士など多くの人の協力を得て本人が答えをみつけることをお手伝いする気持ちで取り組もう

セッションの最後に「生きてる意味って？と思春期に聞かれることが多いのだけど、みんなはどう思う？」と質問をして、それぞれに悩みながらいろんな答えを出してくれました。



私にとっても非常に充実した、そして学びになった時間でした。帰りの瀬田駅でバオバブのパン屋さんが懐かしくて、家族にパンを買って帰りました。

滋賀医科大学の先生方、松井先生、貴重な機会を本当にありがとうございました。



## ～Cancer journeyを共に歩む～ 家庭医だからこそできるがん患者との関わり

亀田総合病院 在宅診療科 西 明博先生  
(滋賀医科大学 医学科37期生)



この度、恩師の松井先生からお声がけいただき、大変僣越ながら課外授業の講師を務めさせていただきました。講義の準備にあたっては、何かを教えるというより、私が初期・後期研修を通して感じた地域医療・家庭医療の楽しさや可能性を伝えられればという思いでスライドを作成しました。質問してもらえるだろうか、90分も間が持つのだろうか、などと不安を抱えながら当日に臨みました。

当日は8名の様々な学年の医学生が参加してくれました。私が学生時代に立ち上げたAMU'S (ダンスサークル) やリレー・フォー・ライフ (がん患者支援活動) の後輩も参加してくれていたのは嬉しかったです。最初は自己紹介で、会社員を辞めて医学部に編入したこと、学生時代はがん診療に興味があり腫瘍内科医を目指していたこと、初期研修中に家庭医療の魅力に気づき家庭医の道を志したこと、などターニングポイントでどう考えキャリアを選択してきたかの話をしました。

その後は講義の本題に入り、「～Cancer journeyを共に歩む～ 家庭医だからこそできるがん患者との関わり」というタイトルで、家庭医の研修中に2年半に渡って外来・入院・在宅で関わり、最期を看取ったがん患者との物語を紹介しました。がん患者ががんと診断されてから歩む地図もなく日程も分からない日々を旅になぞらえてCancer journeyと呼びます。私と患者の会話や私が当時考えていたことを振り返りながら、患者にとって私はどんな存在だったのか、Cancer journeyにおいて家庭医はどんな役割を果たせるのかについて参加学生とディスカッションしました。松井先生が絶妙なファシリテーションで議論を深め、広げてくださったおかげで、学生からは積極的な発言が続き、あっという間の90分間でした。

講義後のアンケートでは《「家庭医の専門性」とは何か、改めて考えさせられた。》《「その人が大切にしていることは何か」を考えるのが家庭医なんだと感じました。その上で、医師として一緒に走る存在になるということ、そういったことがしたいと思いました。》といった感想が寄せられ、大学病院の実習では中々得られない気付き・学びを提供できたように感じました。また、私自身にとってもこれまでのキャリアと今後の歩む道を考える良いきっかけになりました。この度は貴重な機会をいただき誠にありがとうございました。





## ～地底人っていますよね? から始まる訪問診療のコミュニケーション術～



こうせい駅前診療所 所長 佐々木 隆史先生  
(滋賀医科大学 医学科23期生)

医学生さんの実習を受ける際にいつも伝えているのは、人と人との会話は常にすれ違っていること、コミュニケーションは常にすれていること。

うちの診療所での主な実習内容は外来診療・訪問診療見学なので、患者さんとの対話を観察してもらっています。定期診察の方は、一人三分程度の対話で何が導き出されているか？に注目してもらっていますし、新規受診の方は、患者さんは何が言いたいのか、何が不安なのか、を聞き出せているか？に注目してもらっています。我々総合診療医は『ひとをみて』いるので、その『みる』ことの基本的なことを感じてもらうようにしています。

『ひとをみる』こと・全人的ケアを提供する実践は、短時間では容易ではありません。それは患者さんの幸せ・QOLとは何かをみつけることと同じく、常に医療者側が努力し続けることが大切だからです。見方を変えると、医者一人だけで行う仕事ではないということです。

その典型が在宅医療となります。今回の授業では、私が初めて体験した【地底人】との交流をきっかけに、患者さんの幸せ・QOLにどれだけ迫れるかを、参加者の皆さんに考えてもらいました。訪問診療を経験したことない方は想像がつかないと思いますが、まずは初めて会う患者さんから「先生！地底人っていますよね？」といわれる状況を、診察室で言われる風景と、訪問診療先で言われる風景を想像してみてください。診察室での風景はおおむね想像がつくと思いますが、患者さん宅の風景のバリエーションは無限です。部屋の家具・調度品、物のおかれ方、床の状態、におい、家族の動きなどで、おおむね患者さんの背景を理解することが出来て、私は次の行動を決めました。オンライン2D世界ではわからないことです。

総合診療医の成長には、振り返り（Reflection）が大切です。医師同士だけでなく、多職種の視点は成長のネタがいっぱいです。しかしながら、大抵最初はお医者様として扱われますので、多職種の意見の解釈には注意が必要です。そこにも権威勾配を低くするための、コミュニケーションが、自分のためにも、患者さんのためにも重要になります。

学生の皆さんには、学生の時代に様々なことを挑戦してほしいと思います。そして、その時の仲間を大切に。リーダーシップ・フォロワーシップを体験し、世の中にはいろいろな価値観や立場があることを学ぶ。そのなかで、授業や自己啓発本では決して得られないコミュニケーション術が磨かれると思います。





第三弾!  
最終企画  
「実践交流会」

## 聴くと話すのサイエンスとアート ～OSCE対策からデキレジまでの道のり～

浅井東診療所 所長 松井 善典先生  
(滋賀医科大学 医学科25期生)



いよいよ第三弾の報告です。これまでの流れを受けて、いよいよ学生さんたちが実践する機会となりました。内容としてはこれまでの第一弾、第二弾を知らなくてもOKにしました。

講師は昨年まで連続講座を担当していた天津ファミリークリニックの中山先生、弓削メディカルクリニックの中村先生、浅井東診療所の宮地先生です。そして新たに浅井東診療所の大西先生と北川先生も講師で参加してくれました。イントロでは15名の参加者（当日急遽欠員がでましたが、臨時で馳せ参じてくれたメンバー含めて）から自己紹介を行いました。OSCE直前ということもあり、医学科4年生の参加が多かったですが、看護学科からの参加や1年生から6年生までと多様なメンバーで厚みがありました。

基軸となった考え方は「内なる診療（The Inner Consultation）」からのキーワード「応答脳と構成脳」そして「結合と要約」です。応答脳と構成脳とは、コミュニケーションで発生する分析的論理的な側面と直感的感情的な側面の2を意識するためのキーワードとして紹介しました。医学的なコミュニケーションのほとんどは構成脳で意識、計画、目標設定されますが、一方で患者さんの非言語にตอบสนองしつつ、自らの反応や感情を処理する応答脳も重要になります。いくつかのアドリブワークをいれながら、講師メンバーのアドリブデモを随所にいれて、その2つの働きを意識できたところでロールプレイの準備ができました。

3回のロールプレイとフィードバックを行いました。その目標設定が「結合と要約」です。「内なる診療（The Inner Consultation）」では5つのチェックポイントが設定されていますが、その最初の2つを学生さんたちにチャレンジしてもらった構成でした。低学年向けのお題でまず行い、次に診断名はついているが受診理由や解釈モデルを把握するお題、最後にその場で講師が診断名を設定してそれを隠したままというリアル医療面接のお題です。最初のシナリオ以外は患者役を講師が担当して臨場感たっぷりの状況を再現しました。

参加した学生さんたちのレベルが高くて実践は良かったですし、改善点や反省点もよく自ら気づいてくれました。おかげでフィードバックや全体共有の時間も大いに盛り上がりました。3回のロールプレイはいずれも第一弾で紹介した「よく考えられた練習（deliberate practice）」を意識した構成を仕込み、また参加者の集中力もあって、たった半日で学生さんたちが得た経験値や学びは大変価値あるものだったという手応えがありました。

来年度も学生さんたちから企画メンバーを募って、充実のシリーズとして続けていきたいと思っております。



# 滋賀県医師キャリアサポートセンター

(滋賀県地域医療支援センター) 当センターは滋賀県健康医療福祉部医療政策課と滋賀医科大学医学部附属病院に共同で設置し、滋賀医科大学医学部附属病院には専任医師を配置して医師のキャリアサポートを行っています。

## 2023年度 第10回女性医師交流会を開催しました！



医師の働き方改革到来！  
～輝いて働き続けるために、私たちにできることは何か～  
日時：令和5年11月11日(土) 14:00～ フェリエ南草津



滋賀県女性医師ネットワーク会議では、医療現場の課題解決の実現に向けて、女性医師交流会を実施しています。今年度第1部では、滋賀県副知事 大杉住子先生に「滋賀県の女性活躍の推進と子ども・子育て施策について」のご講演をいただきました。参加者からの活発な意見・質問に国政・県政の状況を合わせてお答えいただき、非常に有意義な交流会となりました。

第2部「働き方改革に関する取り組みについて」では、彦根市立病院 中野顯病院長、滋賀医科大学 北川裕利副病院長、済生会滋賀県病院 黄瀬智哉人事課長に各病院での実践と現状についてご講演をいただきました。それぞれ管理職、医師、教員、事務職員としての取り組みなど様々な視点から発表を頂き、多くの業務改善と意識改革のヒントが得られました。全体討論では、各病院での働き方改革進捗についての率直な感想や、診療科毎の対応のばらつき、医療従事者間でのタスクシフトの難しさ、女性医師支援についての具体的なアイデアなど、同じ方向を向いていく組織作りの必要性について討論が行われました。



### 【参加者の感想】

- ・滋賀県の施策について知らなかったことも多く勉強になりました。
- ・知らない政策や現状が多かったので、どういった支援があるのか深く知りたくなりました。多くの人がこのような支援を使えるようになれば良いと感じました。
- ・他職種に対し、医師の仕事は多いと思います。女性のみではなく男性も仕事量を減らさなければ成り立たないと思いました。

講演資料を下記HPにて公開中！

滋賀県医師キャリアサポートセンター  
<https://shiga-ishicsc.jp/>

女性医師ネットワーク会員募集中→

- ・男女問わず入会できます！
- ・会費無料、交流会等をご案内



### ◆◆第2回キャリアサポ懇談会◆◆

令和5年12月4日(月) 16:30～  
場所：滋賀医科大学 一般教養棟  
第一講義室(ZOOM併用)

### 「地域医療に求められる医師像」

講師：辻 喜久 先生  
(総合診療学講座 特任教授)

### お問い合わせ先

#### 滋賀県医師キャリアサポートセンター

相談窓口も設置しています。  
詳しくはキャリアサポHPをご覧ください。

滋賀医科大学クオリティマネジメント課内(附属病院 4階)

住所：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町

TEL：077-548-2826

E-mail：ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp



## HPVワクチンについて理解を深めよう!

# 医学・看護学生がつくる 「じぶんごとcafé」を開催しました

滋賀医科大学 医学科第5学年 沖山 翔太

HPVワクチン（子宮頸がんワクチン）について理解を深めてもらうことや、地域の方との交流などを目的に、滋賀医科大学 国際保健・地域医療研究会「TukTuk」と若者にHPVワクチンについて広く発信する会「Vcan」が協働し、2023年10月9日 平和堂石山店3F REST SPACEにて「じぶんごとcafé」を開催しました。最終的にアンケート記入者が約50名、短時間でも立ち止まって会場の催しを見学されたケースも含めると60～70人ほど、老若男女問わずご来場いただきました。平和堂石山店の企画マネージャー様からはイベント来場者の平均人数は20～30人ほどと伺っていましたので、予想以上にたくさんの方々にご参加いただき、社会的処方につながりました。

私自身、一番嬉しかったことは、アンケートの自由記載欄に「子宮頸がんやHPVワクチンについて知らない情報を学ぶことができ良かった」「健診にいこうと思った」などのコメントが多かったことです。本企画の軸である「HPVワクチンについて正しい知識を持ち、HPVワクチンを打つか打たないか自分自身で正しく判断して欲しい、HPVワクチンをじぶんごと化して欲しい」という想いは、参加者の方々に十分届けられたと思います。

また、高校生の進路相談、子供たち（特に小学生以下）への教育、参加者ご自身が病体験を語る場など、イベント中に遭遇したニーズから医学・看護学生に求めるものがよくわかりました。学内で学ぶことはたくさんありますが、地域に出て参加者の方々と話すことで気づくこともたくさんあり、そういった気づきや学びの中で地域の方々と楽しく交流することができ、非常に貴重な体験になりました。そして、医学・看護学生が地域に出る意義は大きいと自信を持ちました。

さらに、学生が主体となって企画展開したことで滋賀医科大学と平和堂の連携がうまれました。学生の働きかけで大学と企業、大学と地域を繋ぐ具体例が1つできたことを嬉しく思います。小さな取り組みですが、今後も「じぶんごとcafé」の活動を持続可能な形で続けていき、また同じような取り組みが他の地域にも広がっていくことで、医療を基盤とした安心して暮らせるまちづくりに貢献できれば幸いです。



# 入会・ご寄附のご案内

皆様からの会費とご寄附金を財源として活動を進めてまいります。出費がかさむ折とは存じますが「地域医療を担う医学生看護学生の育成支援事業」にご支援いただける方々のご協力をお願いいたします。

## 会員は

会員の種類		会費	入会金 (初年度のみ)
正会員	個人	年会費 2,000円 + 寄附金 3,000円以上	5,000円
	団体	年会費 5,000円 + 寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上 できたら 3,000円以上	

ご寄附・賛助会費をご入金された方は「税制上の優遇措置」【寄附金控除、または寄附金特別枠控除（税制控除）】を受けることができます。

ご入金された方には「寄附金の受領書」を郵送しますので大切に保管いただき、確定申告時には、「申告書」に「寄附金の受領書」を添え最寄りの税務署にご提出ください。

なお、詳細につきましては、最寄りの税務署にお問い合わせください。

## 編集後記



1月1日に発生した能登半島地震により犠牲となられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。被災地域の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

昨年夏の宿泊研修（日帰り）では、たくさんの参加学生と近江八幡市、沖島へ訪問させていただきました。訪問先の皆さまの温かいご協力により、地域の医療を中心に文化や歴史にも触れることができました。貴重な体験をさせていただきました。

今年も医療関係者と県民の皆さまのご協力により、学生の皆さんが地域のことを知り考える一助となるよう活動を続けていきたいと思っております。今後ともご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



## ～ 里親学生支援室からのお願い ～

将来、滋賀県内で働くことに興味を持っている学生（里子）に対して、県下で活躍する一先輩として、学生生活や将来の進路などの相談にのるアドバイザー（里親）を募集しています。

本事業に賛同していただける方は、里親学生支援室までメールで職業・氏名・「里親希望」と明記の上、お申し出いただきますようお願い申し上げます。

（事業の詳細はHPをご覧ください。）

【お問い合わせ先】 滋賀医科大学里親学生支援室  
TEL: 077-548-2072 E-mail: satooya@belle.shiga-med.ac.jp  
URL: <https://www.shiga-med.ac.jp/~satooya/>

## NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.23

発行：2024年3月25日

編集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構

所在地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内

TEL：077-548-2168

URL：<https://www.shiga-iryoku-ikusei.jp/>